طرح

白秋全集

16

詩文評論

2

白秋全集 16　第九回配本（第Ⅰ期 一～二四巻）

一九八五年八月二日　発行

定価三九〇〇円

著者　北原白秋

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 北原隆太郎 1985　Printed in Japan

ISBN4-00-090956-8

目次

『童心』

童心……五
童心……六
麻布山……一一
お花畑の春雨……一六
鐘の音を聞きながら……二七
胡瓜が熟つた……三一
漁村の秋……三八
紅葉を焚いて……四八
寒中消息……五一
金魚経序品……五四
山荘建立……六三

巡礼詩社文抄……六七
巡礼詩社の言葉……六八
寸金抄……六九
白金独語……七二
真珠戒……七四
玲瓏寸言……七六
紫烟草舎文抄……八一
紫烟草舎の言葉……八二
紫烟草舎解散の辞……八五
新芽は萠えよ……八八
群蝶の舞……一〇三
『雀の生活』より……一〇四
小序(一〇四)　一羽雀(一一四)
雀と人間との愛の一節(一〇五)　雀の死(一一〇)
海の画の解説……一一三
『海上法悦』(一一三)　『海空』(一一四)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「泥濘展望」(一三五)

野外劇場の初夏……一三〇
蒼蠅……一三六
神童の死……一四一

「胡蝶の海渡り」(一三七)

蚕豆の連珠……一五一
東京景物詩余言……一五二
印度更紗の言葉……一五三
真珠抄序及び短唱……一五四
永日礼讃序及び短唱……一五五
破調私見……一五六
木の葉のささやき序歌……一五八
詩集白金の独楽序……一六〇
わすれなぐさはしがき……一六一
別離抄序……一六三
真間の閑居の記……一六四
詩集月に吠える序……一六五
愛の詩集のはじめに……一七〇

食後の歌序……一八二
小田原日記（その一節）……一八六
木馬集序……一九〇
童謡集とんぼの眼玉序……一九三
香炎華序……一九八
よぼよぼ巡礼（芸術論抜粋）……二〇二
白秋詩集序……二〇九
南海異聞……二二三
小笠原の夏……二二四
小笠原島夜話……二二五
巻末に……二三七

『童心』増補

〔アルス刊『白秋全集』第一三巻〕

虎が煙草を吸ふ……二四五
お賽銭の話……二五三

ヴァイオリンの絃……二六〇
銀の湯沸の話……二六五

〔アルス刊『白秋全集』第一六巻〕

明る妙跂……二七一
口語歌論（消息）……二七三
「国詩」募集に就いての感想……二七九
「国詩」審査の批難に就いて……二九一
紫烟草舎夜話……三〇〇
塊　一（三〇〇）　枯木一本松二列棕櫚の木三本萱千駄（三〇一）
山家の俚謡……三〇四
短歌私削……三一一
山荘雑筆……三二一

『お話・日本の童謡』

日本の子供たちに……三三五
蕨とむじな……三三九

紡車の音……三四三
ねんねのお守……三四八
一、でんでん太鼓(三四八)　三、蹴られ子守(三五三)
二、香箱、鏡(三五二)　四、買ひ物(三五四)
青葡萄……三五七
この子のかはいさ……三六〇
牡丹……三六五
牡丹の庭から　子守のお話その一……三六七
守がつらさに　子守のお話その二……三七〇
与勘兵衛瓜　子守のお話その三……三七五
お墓のあやめ　子守のお話其の四……三八二
ねんねん合歓の木　子守のお話其の五……三八六
蛍……三九一
尼が紅……三九七
鳩の浮巣……四〇一
火消しのからす……四〇四
蝸牛……四〇七
おころり小山の雉子……四一四

兎のお耳……四一九
赤い山・青い山・白い山……四二一
山の木の実……四二四
笛の中の天童……四二七
胡桃の子ども……四二九
天神さまとお釈迦さま……四三一
開いた開いた……四三三
かうもり……四三五
酸漿……四四一
蜻蛉……四四四
砂山……四四八
お月さまいくつ……四五二
みやらび……四六一
雁……四六二
鴉鴉何処へ行く……四六七
愛嬌挨拶……四七四
大寒小寒……四七七
雪こんこん……四八二

お正月さん……四九〇
田鼠打……四九五
おたまじやくしと蛙……四九七
鳶とろろ……五〇二
たあんき、ぽうんき……五〇八
大きい頭……五一四
花の数へ唄……五一七
鳥の数へ唄……五二一
豆の数へ唄……五二七
顔あそび……五三〇

〔参考〕

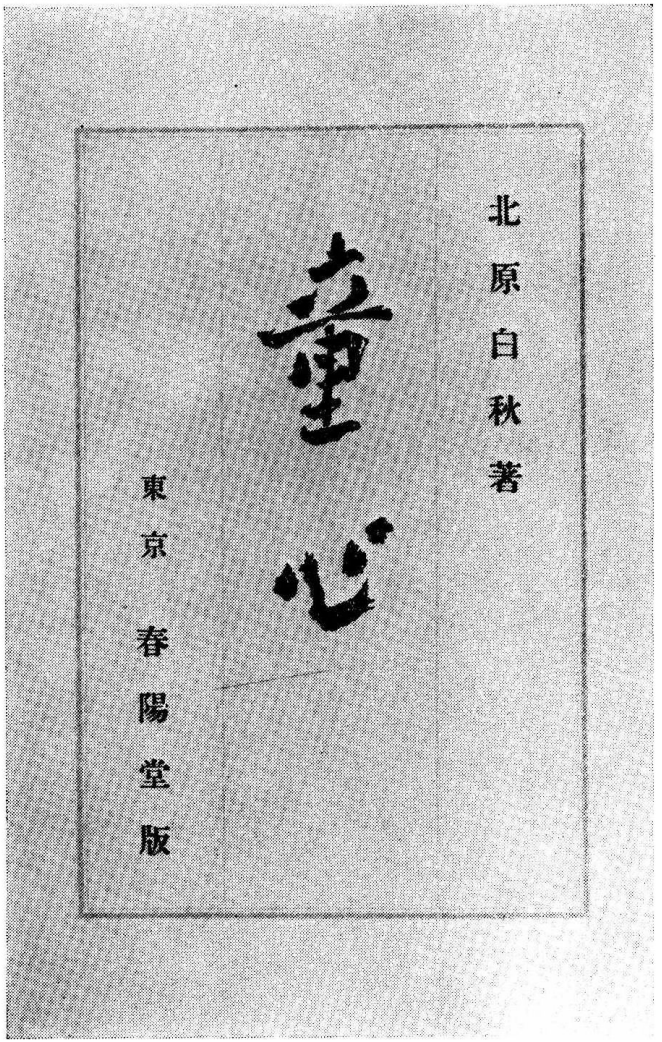
『羊とむじな』……五三三
はしがき(五三五)
ねんねのおうた(五三六)
夕焼小焼(五三八)
牡丹とあやめ(五四〇)
子守(五四一)
後記……五四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『童心』

〔表紙〕

〔大正10年6月18日　春陽堂刊〕



〔本扉〕

童

心

童心

碧い碧い大空の下、曠い野の、とある白い茨の花の傍で人間の小さな子供がひとり、両手を両の眼に当てて、声をあげて、心ゆくまで泣いてゐた。私は頭を撫でて、どうしたんだと云つた。何が悲しいのと訊いた。何だか知んねえやい。子供は十本の指の間から涙をぼろぼろ滾しながら、明るい四方を見廻はした。さうして急にまた啜り上げた。何だか知んねえやい。さう云はれれば、おお子供よ、私も何にも知らない。

私は改めて大空を見た。その碧い円い天井を。而してまた吾身の周囲を見た。果てしもない野や丘の起伏を。その向うからは煙が幾つも上つてゐる。それがみんな動いてゐないものは無い。私はまた足元を見た。白い茨に土蜂が動いてゐる。土蜂が動くたびに茨の花が散るのである。

おお子供よ、私も何にも知らない。

*

蓮の花が咲いたら持つて来てお呉れ、私はかう子供に頼んで置いた。その子供は蓮の花が咲くと、早速、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com